

# 持続可能な社会の創り手の育成と資質・能力 －上越教育大学附属小学校の創造活動の系譜を中心に－

渡 辺 径 子\*・釜 田 聡\*  
(令和2年3月3日受付；令和2年4月28日受理)

## 要 旨

本研究は、研究課題の設定、「資質と能力」の構造の観点から、附属小学校のカリキュラム開発の歴史をカリキュラムと評価方法を中心に体系的に見直すことにより、上越教育大学附属小学校のカリキュラム開発の特徴を明らかにすることを目的としている。その結果、本研究では、上越教育大学附属小学校で行われた研究の特徴として、以下の2点を導出することができた。

1. 研究課題は、これまでの研究経緯、現代社会の課題、教育課程の一層充実・発展の視座から述べられている。
2. 育成すべき「資質・能力」は、研究主題と研究内容との関係で、明確に資質・能力として示している場合と、めざす子どもの姿の中に組み込む形で示している場合があった。

## KEY WORDS

持続可能な社会の創り手 資質・能力 上越教育大学附属小学校

## 1 研究の背景

### 1. 1 持続可能な社会の創り手と資質・能力

2016年12月21日中教育審議会（答申）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」「第2章2030年の社会と子供たちの未来」において、「子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要である。」<sup>(1)</sup>と示されている。2017年3月に公示された小学校学習指導要領では、「前文」と「総則」において、「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられている。さらに、小学校学習指導要領「総則」第13で、「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、生きる力を育むことを目指すに当たっては、学校教育全体並びに各教科、…総合的な学習の時間…の指導を通して、どのような資質・能力の育成を目指すのかを明確にしながら、教育活動の充実を図るものとする。」と記された。このことは、今回の改訂で、持続可能な社会の創り手を育成する教育が、新学習指導要領の基盤として位置付けられ、その資質・能力を明示した上で教育活動の充実が求められたこと意味する。

### 1. 2 上越教育大学附属小学校の研究経緯

上越教育大学附属小学校（以下、附属小）は、1974年から「教科の目標にこだわらず、子どもの自然な活動に主眼をおいた単元」を重視した総合単元の開発を行い、1980年までの一連の教育課程研究を第一期教育課程研究と名付け、現在まで教育課程研究に取り組んでいる（現在は第十期教育課程研究）。持続可能な社会の創り手と附属小の教育活動の関係を、2018年度に実践された創造活動「移り住まう」（6年生）を例にして説明する。

この創造活動は、子どもが上越市立吉川区川谷地区（以下、川谷）の自然や人とかかわったり、仲間と共に豊かさの意味について考えたりしながら、社会の現況を見つめ、よりよい生き方を考える活動であった。子どもは、限界集落でもある川谷のブナ林を駆け回ったり、生き物を探したりして全身で自然を感じた。また、川谷で宿泊体験活動を行ったり、川谷の人々とかかわったりして、川谷の見方をひろげた。また、Iターン移住された方とのかかわりを通して、川谷の見方や考え方をつくり変えながら、よりよい生き方について考えたり、自分を見つめ直したりした<sup>(2)</sup>。まさに、持続可能な社会を考えるための自然環境と社会環境、自分の在り方を重層的・総合的に考えることを促す優れた創造活動であった。こうした創造活動を生み出す附属小の教育課程の系譜をたどり、教育実践上の知見を導出す

\*学校教育学系

ることは、これからの持続可能な社会の創り手の育成とそのため資質・能力の設定と育成、さらにはカリキュラム・マネジメントが喫緊の課題である小学校教育において、極めて有益な示唆を得ることができると考える。

### 1. 3 先行研究

#### 1. 3. 1 附属小

附属小の研究成果は、主に三つに分類できる。一つは、毎年の研究会で発刊される各種出版物である。二つ目は、研究の大きな転換期で発刊される研究出版物（いわゆる、全国出版）である。三つ目は、附属小教員が単独で、あるいは大学教員等と共同で発表した研究出版物である。しかし、いずれも、単年度の研究成果や、教科単位や単独の創造活動等、それぞれの教育課程期にかかわる研究成果である。管見する限り、持続可能な社会の創り手と資質・能力、カリキュラム・マネジメントの視座から教育課程研究全体を俯瞰した研究は見られない。

#### 1. 3. 2 ユネスコスクール

文部科学省および日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを持続可能な開発のための教育の推進拠点と位置づけている<sup>(3)</sup>。ユネスコスクールでは、暮らす、食べる、生きるの観点からの教育実践を推奨し、徐々にその教育実践が集積されてきた。しかし、ユネスコスクールは国内外の横のネットワークの構築を推奨されているが、教育実践校の縦軸、すなわち教育実践校の長年にわたっての取り組みを、持続可能な社会の創り手と資質・能力の育成する視座から俯瞰した研究は管見する限り見られない。

## 2 研究の目的と方法

### 2. 1 研究の目的と意義

本研究では、附属小の創造活動の生成過程と創造・開発の歩みを、研究主題設定の経緯、「資質・能力（めざす子ども像）」と教育課程の構造、研究評価の視点から整理し考察することで、附属小の教育課程創造・開発の特質を導出することを研究の目的とする。

附属小は長期間、資質・能力（めざす子ども像）を設定し、教科枠内にかかわらず、教科横断的・総合的な学習活動を創造・開発してきた。また、子どもの生活経験や体験活動を重視し、創造活動を脈々と創造・開発してきた教育実践校は極めて少ない。その研究成果は、新潟県内のみならず、広く全国の教育実践者や教育実践校に影響を与えてきた。

以上のことから、本研究は、持続可能な社会の創り手の育成を射程に入れる現在の教育実践研究に一石を投じる研究といえる。

### 2. 2 研究の方法

本研究の枠組みは、小出・濁川・中野・釜田（2016）が上越教育大学附属中学校の教育課程研究で活用した枠組みを援用する<sup>(4)</sup>。理由は、次の2点である。1点目は、小出らの研究は教育課程の開発研究のあゆみを追ったものであり、本研究との親和性があること。2点目は、上越教育大学の附属小と附属中は、創造活動や総合単元的な学習、教科横断的・総合的な学習活動を基軸とした教育課程の開発に継続的に取り組んでいることから、小出らの研究枠組みを援用することが効果的と考えたからである。

最初に、1974年から2018年までの研究紀要、研究出版物等を手掛かりに教育課程の創造・開発の系譜を抽出する。次に、研究主題や研究の背景、育成すべき資質・能力（めざす子ども像）、教育課程の構造、研究評価の視点から整理し、時系列に分類整理する。続いて、育成すべき資質・能力をはぐくむために、教育課程上どのような工夫をしているかを抽出し考察する。最後に、持続可能な社会の創り手を育成する視座から教育実践研究を展望し研究目的に迫る。なお、本研究では、主たる研究対象を主に低学年の創造活動とする。理由は、附属小の研究開発は、主に低学年の活動から生成された経緯があるからである。

## 3 研究の結果と考察

附属小は、1974年以降の自校の研究を教育課程研究と位置付け、教育課程研究のあゆみを、「期」ごとに分類整理

している。現在では、第十期教育課程研究として継続されている。本研究では、基本的にこの分類方法に基づき、それぞれの「期」の教育課程研究を分類整理し考察する。

### 3. 1 第一期教育課程研究 昭和49年～昭和55年（1974年～1980年）

子どもの立場に立って、五つの教育活動（教科、総合単元、総合活動、道徳、集団活動）による教育課程を編成する。

表1 子どもの立場に立った教育課程の編成

1 研究主題	「ゆとりと発展のある教育」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)低学年教育の反省から
3 育成すべき資質・能力 (めざす子ども像)	低学年教育のねらいと指導の構えを明確にし、1・2年生に総合単元を創設 総合単元は、子どもの創造性と気力、体力を培い、広くは子どもの身近な社会や自然に働きかけていく経験や行動力の育成をねらう。子どもの自然な欲求や関心、旺盛な行動力に応じるよう教科の枠にとらわれない生活意識に結び付いた総合的な活動。学校生活、社会、自然、自由活動の4つの単元群を設定。
4 教育課程の構造	1・2年生に総合単元を創設し、教科・総合単元・道徳・集団活動。1976年から3・4・5・6年生に総合活動を創設し教科・総合活動・道徳・集団活動。年間指導計画を学年ごとに作成。
5 研究評価	子どもから出発して子どもにかえる、体験することを通して子どもは学ぶなどの基本的な考え方が生み出された。教科等の内容が自然な活動の展開の中で学ばれていく。

「教科の目標にこだわらないで、子どもの自然な活動に主眼をおいた単元」を導入することとし、低学年の総合単元から総合単元的な学習活動を構想した。活動そのものの目安として「学校生活」「社会」「自然」「自由活動」の4分野に分けて活動を構想した。総合単元の特性として①学校と地域の実態の中から生まれる、②教師と子どもによって作りだされる、③小単元を基本とする、④ゆとりある時間の中で継続的に指導する、とした。

この期に、「子どもたちをしていかに学ばせるか。いかに自発的ならしめるか。いかに自らの力で知識を獲得していかせるか」の問い続けが始められ、この後一貫した「教育は子ども理解の原則に立つことである」との教育観を脈々と受け継いでいくこととなる。

### 3. 2 第二期教育課程研究 昭和55年～昭和60年（1980年～1985年）

第一期教育課程研究で編成した教育課程を人間教育の観点から見直し「人間として生きる力を形成する教育課程」の構成に取り組む。

表2 人間として生きる力を形成する教育課程の編成

1 研究主題	「子どもが生きる学校生活の創造」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力 (めざす子ども像)	1・2・3年生に総合単元活動の設定 ○「人間教育」のため、人間として生きる力を身に付けさせる、感性や創造的知性を育てる、学び方を育てることを重視。学校生活、社会、自然、自由活動の4つの単元群を設定。 1年生：探検家になりきって、未知のところへ挑戦し続けることを通して、元気いっぱい身体を動かし、豊かな感性を培っていく子ども 2年生：人の生業にふれながら、ラムちゃん共和国の国民として生活することにより、働くことの実感を伴った社会認識を深めていく子ども。
4 教育課程の構造	一人ひとりの子どもが大切にされる教育に焦点を当て、1年生（入門期）教科活動・総合単元活動、2・3年生（移行・充実期）教科活動・総合単元活動・集団活動、4・5・6年生（充実・発展期）教科活動・総合教科活動・心の活動・集団活動の「2・3・4教育活動」を創造。1982年に総合活動が廃止されこの形に。1983年から総合単元が総合単元活動に。年間指導計画を学級ごとに作成。
5 研究評価	体験と総合の意味を改めて問い直すと、当校の教育課程は「子どもが个性的に学び、学ぶ過程で学び方の基本を身につけていく」という特徴があることを確認した。また、体験重視の総合的な学習を中核にした教育課程では、一面的であったり断片的であったりする見方や考え方に対し、それが誤りであることを見抜き、自分が納得するまで確かめたり調べたりできる子どもが育つことも確認した。

この期に、その後、第九期まで続く「2・3・4教育活動」が確立し、総合単元活動は年間を通した大単元として設定された。総合単元活動や総合教科活動などの総合的な学習活動は、次代に生きる子どもの育成のために必要な教育という点から重視しなければならないとし、①子どもが獲得する知識や技能は子どもの中で統一され、生きてはたらかねばならない、②感性や創造的知性の育成が必要だから、③総合的なものの見方・考え方を育てることが求められているから、という三つの理由を挙げている。この期から総合単元活動は、学年ではなく学級ごとの指導計画が作成され、担任の独創性が生きるようにした。

### 3. 3 第三期教育課程研究 昭和60年～平成元年（1985年～1989年）

「生涯にわたって学び続ける基礎を築く」の視点から教育課程の充実を図る。

表3 生涯にわたって学び続ける基礎を築く教育課程の編成

1 研究主題	総合と教科とを関連的・一体的にする視点から「学び続ける基礎を築く学校教育」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力(めざす子ども像)	総合単元活動 ○自分の願いをふくらませながら、願いの実現に向けて多様にはたらきかける子ども 総合単元活動を通して「書く」ことの日常化 1年生：自然な欲求・関心、旺盛な活動力保障し、豊かな感性と豊かな心身の発達を促す土台作りに重点 2年生：ものの見方・考え方、はたらきかけ方・とらえ方などを意図的に広げながら、ものごとの意味やわけから、自然と人々の営みなどを関連的・一体的にとらえさせることに重点
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続 総合的な教育活動をもつ教育課程における教科経営の在り方を模索
5 研究評価	これまで15年の継続研究の成果を集約することで総合的な教育活動の一層の充実が図られ、新教科「生活科」の着実な実践に大きく寄与したことを示した。総合的な教育活動を持つ教育課程において、総合を積極的に生かす・活用するとの立場から教科経営を改善することで、子どもの学び方が育つ教科経営となることを示した。

この期は、様々な社会的背景の中で、21世紀に向け、生涯学習の観点から教育課程を意味付け、教育活動の充実を図った。学校教育が生涯学習に必要な資質を培う使命を担っているとの観点から学び続ける基礎を築くとは、生き生きと学習する真の学習主体を育てること、基礎的な知識・技能を確実に習得させることの2側面を満たすこととして研究を進め、個性的な学習が価値意識の形成を生み出すことを明らかにした。

### 3. 4 第四期教育課程研究 平成2年～平成5年（1990年～1993年）

「創造性を伸長する」の視点から子どもの自立的な追求の連続を目指し、教育課程の充実を図る。

表4 創造性を伸長する教育課程の編成

1 研究主題	個の確立を目指した「創造性を伸長する教育課程」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力(めざす子ども像)	総合単元活動 1年生：願いの実現に向けて、対象と継続的にかかわり、心情を通わせていく子ども 2年生：願いの実現に向けて、対象に積極的に働きかけていく子ども
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続
5 研究評価	「喜びをもつこと」「自信をもつこと」「学習を通して自らを鍛えようとする」ということが創造性を育てる学習の3つの要因となることを示した。教育に求められている、自ら学び、変化する社会に主体的に対応する子どもを育成するためには、子ども一人一人が自分のよさを発揮し、人間としての豊かさを求め、主体的に生きていく力を身に付けていくということが必要であること。その意味で本研究が21世紀を生きる子どもをどう育てていくかということに正対した研究であったことを示した。

この期は、「自分から活動に取り組み、試行錯誤を重ねながら活動を成就していく子ども」の姿の実現にあった。この観点から当時の新しい学力観に応える「バランスと連続・発展のある教育課程」編成の方向を求めようとするよ

うになった。

### 3. 5 第五期教育課程研究 平成6年～平成8年（1994年～1996年）

12年間の学校教育と生活の枠組みの中で、子どもの主体的・創造的な学びの道筋を「一貫する学び」ととらえ、子どもの学びが連続・発展するような教育課程を編成する。

表5 12年間の学びが連続・発展する教育課程の編成

1 研究主題	幼・小・中の連携に注目した「12年間の学びの創造」
2 主題設定理由(背景)	(1)現代社会の課題から (2)これまでの研究経緯 (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力 (めざす子ども像)	総合単元活動 1年生の総合単元活動では、子どもは自分のやりたいことを決めたり、対象への思いを表出したりしながら、できたことややり遂げたことへの満足感・成就感を十分に味わう。こうした子どもの姿こそが、幼稚園教育での学びを連続・発展させ、活動を通して自らの生活を充実させている姿である。そして総合単元活動の一貫した学びである「自らやり遂げる喜びを味わう学び」を自ら働かせている姿でもある。
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続。
5 研究評価	教科・教育活動の固有の一貫する学びに着目し、それをもとに、その類似性・共通性を見い出し、教科・教育活動の枠組みを超えて単元群を編成する可能性について議論した、その着眼と可能性については「総合」の新設に呼応するものであることを示した。

この期は、従来の入門期、移行・拡充期、充実発展期を見直したり、3年生の総合単元活動の在り方を議論したりした。初めて、附属幼稚園・小学校・中学校の教員が互いに授業を参観し合うという方法を取り入れた。

### 3. 6 第六期教育課程研究 平成8年～平成15年（1998年～2003年）

ビルドアップ研究へと手法転換を図る。「生き生きとした子どもが育つ学校」を目指し、子どもを見る視点を限定せず、子どもの姿からカリキュラムを作成し教育課程を編成する。

表6 生き生きとした子どもが育つ教育課程の編成

1 研究主題	子どもの姿からカリキュラムをつくる「生き生きとした子供が育つ学校」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力 (めざす子ども像)	総合単元活動 1年生：思いっきりいっしょに夢中になって遊ぶことによって、いろいろなことができる自分に気付く子ども 2年生：「仲間とつくる・仲間をつくる」から「仲間になっていく」子ども。
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続
5 研究評価	カリキュラムに着眼した研究では、各教師がそれぞれに設定したカリキュラムキーワードが「生き生きとした子どもの姿はこうだ」という姿を示していた。2003年研究「未来に拓く学びの生成」では、自己と人、もの、こととの関係の中で立ち現れる<いま・ここ>の学びをとらえ、時間軸と関係軸による図に表すに至ることができた。

この期は、研究手法の大きな転換期であった。事例法による研究（ビルドアップ）を行った。限定的な研究主題でなく、一般的な目標を掲げて教育実践を展開した。そして一人一人の職員の問題意識が生かされた実践が行えるようにした。全ての教育活動を対象とし、目の前の子どもの姿から教育課程を開発した。

### 3. 7 第七期教育課程研究 平成16年～平成20年（2004年～2008年）

子どもが、「人、もの、こと」とのかかわりをひろげていくことを視点に、「心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程」の編成に取り組む。

表7 心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の編成

1 研究主題	関係力に焦点を当て「心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力(めざす子ども像)	総合単元活動 ○総合単元活動における「心豊かに生きる子ども像」は、自分の思いや願いを表し、生きる世界を広げたり、自己を確かめたりしていく子ども。 1年生：自分の好きなものや身近な人にはたらきかけながら、かかわることに自信をもち、楽しみをつくっていこうとする子ども。 2年生：友だちといっしょに対象にかかわりながら、対象を媒介として仲間になっていく楽しさを感じる子ども。
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続
5 研究評価	「心豊かに生きる子ども」の中に育つ学力を「関係力」と規定し、「関係力」は他者(人・もの・こと)との相互作用を繰り返す力とした。子どもも教師も他者との相互作用を繰り返しながら、自分らしさを発揮し、よりよく育まれることにより、子どもと教師が共に生きる学校へと変わってきている姿がある。

この期は、子どもと他者との間で繰り返される相互作用に価値を見いだした。また教師は、「自分、仲間、もの、こと」と「関係力」が発揮される四つの視点「ねらいとする姿、中心的な他者、方途、資質・能力」等のある程度の規準性に寄り添いながら、自分の持ち味を生かして研究を進めことにより教師の子どもを見る目が広がり、多様な場面において子どもの姿を受け止め、次の活動をつくるようになった。どのように子どもを他者とかわらせていくのかを考えるようになったことにより、カリキュラムデザイン力が高まっていった。

### 3. 8 第八期教育課程研究 平成21年～平成23年(2009年～2011年)

人間としての生き方に着目し、「人間社会を生きる子どもが育つ学校」の教育課程の編成に取り組む。

表8 人間社会を生きる子どもが育つ教育課程の編成

1 研究主題	各教科・教育活動における「人間社会を生きる子ども」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力(めざす子ども像)	総合単元活動 ○総合単元活動における「人間社会を生きる子ども」は、諸感覚をはたらかせて人・もの・ことと繰り返しかわったり、仲間と共に活動したりすることを通して、自分の生きる世界を広げ、自信をもって行動する子ども。 1年生：体験を通して膨らんだ喜びや楽しさを表し、自信をもって自分の生きる世界を広げていく子ども。 2年生：試行錯誤を重ねながら、思いや願いを実現しようとする子ども。
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続
5 研究評価	教師が対象のもつ新たな価値に気付きよりよい活動を構想・展開しようとしたり、子どもを中心に据え教科においても総合的な視野から課題を追求する活動を生み出すことにより、高く安定した「自尊感情」に支えられ主体的に知識や文化とつながったり仲間とともに新たな知識や価値をつくったりする子どもを確かにはぐくむことができる。「総合的な教育活動」だけではなく、教科においても、総合的な視野から課題を追求する構想、展開を目指し、子どもを中心とした活動を生み出すようになった。

この期は、一人一人が社会の中に埋没することなく、よりよい社会をつくるため、人間としてよりよく生きていく子どもをはぐくみことをめざしていく中で、子どもの心の動きに着目した。様々な自分を見つめ、よりよい生き方を目指そうとする心の動きを「自尊感情」と定義し、それを高めたり、生かしたりすることに価値を求めた。

### 3. 9 第九期教育課程研究 平成24年～平成26年(2012年～2014年)

子どものつくる意味に焦点を当て、「自分らしい生き方をつくる子ども」をはぐくむ教育課程の編成に取り組む。

表9 自分らしい生き方をつくる子どもをはぐくむ教育課程の編成

1 研究主題	子どものつくる意味に焦点を当て「自分らしい生き方をつくる子ども」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)教育課程の一層の充実・発展
3 育成すべき資質・能力 (めざす子ども像)	総合単元活動 ○望ましい子どもの歩みを規定せず、目の前の子どもの歩みから、対象との出会わせ方、活動の展開の仕方、教師のかかわり方について考え、子ども理解を深めながら日々の教育活動をつくる。 1年生：日常的・継続的な活動や繰り返しの活動を重視。子どもが自分なりの願い実現に向けて活動に没頭し、対象に働きかけ、楽しみながら自分を出発することを目指す。 2年生：一つの対象にかかわることを契機に様々な活動を行うことにより、活動対象やものの見方・考え方を意図的にひろげることを目指す。
4 教育課程の構造	「2・3・4教育活動」を継続
5 研究評価	「子どもは意味をつくりながら成長する」という子ども観に立ち教育活動をつくっていった中で、子どもは本来、主体的で創造的であり、自らの意思でよりよく問題を解決しながら、学び続けていくことを実感した。

この期は、子どもが過去、現在、未来においてどのように意味をつくるか、子どもが何とどのようにつながりながら意味をつくるのかなど、子どもの歩みをとらえながら、対象との出あわせ方や教材の価値、活動の展開を吟味しながら実践を重ねた。

### 3. 10 第十期教育課程研究 平成27年～平成30年（2015年～2018年）

感性に焦点を当て、「今を生き明日をつくる子どもが育つ学校」の教育編成に取り組む。

表10 今を生き明日をつくる子どもが育つ教育課程の編成

1 研究主題	感性に焦点を当て「今を生き明日をつくる子どもが育つ学校」
2 主題設定理由(背景)	(1)これまでの研究経緯 (2)現代社会の課題から (3)新たな教育課程の創造
3 育成すべき資質・能力 (めざす子ども像)	創造活動 ○子どもも教師も夢中になる、子どもが学びをひろげる、よりよい学級集団づくりにつながる、感動ある生き方をつくる、一人一人の学びの道筋を大切に活動。 1年生：対象への愛着を深めながら、自分を存分に発揮し、仲間とともに生活をつくる。 子どものもつ遊び性を生かしながら、学校生活への適応を重視。 2年生：体験や行動の範囲を広げ、挑戦を繰り返しながら、自分の可能性をひろげる。 体験や行動の範囲の拡大を重視。
4 教育課程の構造	「感性」が位置づく、4つの教育活動「創造活動」「実践道徳」「実践教科活動」「集団活動」からなる教育課程の創造
5 研究評価	「感性」を「包括的・直観的に行われる心の動き及びその能力であり、知性と相補的にはたらきながらよりよい『自分』をつくる土台となるもの」と定義した。「材」にはたらきかけ、はたらきかけられる中で、子どもが自らの中に、その「材」とかかわるからこそその見方・考え方をつくり、知識、技能を身に付け、意味や価値をつくる過程を、「探究」ととらえ、「探究」における子どもの様相は、「感性」がはたらく姿の表れであると考えようになった。その「探究」を促す「しかけ・手立て」の在り方を一単位時間から、をし、その「感性」をはたらかせながら「材」と一体となることで実践の質が高まることを実感した。

創造活動は、漠然とした未来のイメージだけでなく、継続的にはぐくむ願いや日々の学校生活における思いから生まれる「夢」の実現に向かいながら、生きる喜びをつくる活動を主眼とした。子どもが創造活動を通して創造するのは、学級や学校における「自分の居場所」「身の回りの環境」「学級独自の文化」とした。

## 4 まとめと今後の課題

### 4. 1 まとめ

本研究を、研究主題と研究の背景、育成すべき資質・能力（めざす子ども像）、全体を通じての三つの視点から述べ、研究のまともとする。

#### 1) 研究主題と研究の背景

研究主題設定の理由は、第一期から第十期まで、これまでの研究経緯、現代社会の課題、教育課程の一層充実・発展の視座から述べられている。第一期のみ、低学年教育の反省を含めて研究主題設定の理由が述べられている。また、第十期に新しい教育課程の創造の視座から研究主題設定の理由が述べられている。

第一期については、将来の生活科の萌芽にあたる教育実践を生成するきっかけとなった時期でもある。また、第十期の新しい教育課程の創造は従前の附属小の教育課程研究を根本から見つめ直そうとする徴候がうかがえた。

#### 2) 育成すべき資質・能力（めざす子ども像）

育成すべき「資質・能力」は、研究主題と研究内容との関係で、明確に資質・能力として示している場合と、めざす子どもの姿の中に組み込む形で示している場合があった。いずれにしても、教育課程全体を通じてと、各学年・各クラスの教育実践を通じて、育成すべき「資質・能力」及びめざす子ども像の評価を行っている。

附属小の教育活動の中心を、子どもの活動に置くといっても、野放図な活動を推奨するのではなく、そこには教員集団が設定しためざす子どもの姿（子ども像）が明示され、教育活動創造の基盤となっている。すなわち、設定された子どもの姿（子ども像）と開発された創造活動には、現在求められている資質・能力の設定と育成、教科横断的なカリキュラム・マネジメントの方途がすでに組み込まれていることが確認できた。

#### 3) 全体を通じて

附属小の研究系譜をたどった結果、次の2点が確認できた。一つは、附属小の教育実践上の文化である。附属小では、第二期から各学年・各クラスで、総合的な学習を基軸とした年間の教育活動を構想し実践している。つまり、教育の内容と方法の自主編成権のかなりの部分を学級担任に一任したことになる。もう一つは、活動の内容と方法の適宜性と柔軟性である。内容面では、その時々々の社会問題を重視している。その結果、創造活動の中に、限界集落や少子高齢化の問題、食、生命、環境問題など、現代の社会問題、地域の課題が適宜組み込まれていることが確認できた。方法論では、主体的な学びを深める方略が各活動構想に浸透している。つまり、教員は活動の構想段階で、大きなストーリーを描き、学びの深まりや子どもの変容に応じて柔軟な教育的営みを講じているのである。

また木村（2012）がイギリスの環境教育の手法を用いて提唱している「学びのIn・About・For」<sup>6)</sup>に照らしてみると、第一期から第十期まで徹底して子どもの発達段階を考慮して活動を構成している。低学年ほど「没頭する・夢中になる・浸る」という「In」の活動が多く、中・高学年になるにつれ「こだわる・調べる・知ろうとする」という「About」の活動や、「だれのために・なんのために」という「For」の活動にポイントが移っている。しかし、高学年であってもまずは「In」の活動から始めているところに、子どもを夢中にさせたい、子どもを対象に真に向き合わせたい子ども自身に問題や課題を見つけさせたいという教員の強い思いが確認できる。この「学びのIn・About・For」から導き出される学びが、藤井（2018）が述べる現在求められている資質・能力を育成するために必要な「文脈性のある学び」<sup>6)</sup>とも重なるものである。

### 4. 2 今後の課題

附属小の教育課程は、子どもに身近な事象・地域の事象の中にある持続不可能と思われるヒト・モノ・コトで出会わせ、その事象とのかかわりの中から、自分の在り方を見出すことを大切にしている。当然、低学年から高学年の発達段階を考慮した上で、活動構想が立案されている。一方で、低学年での学びが、中学年、さらには高学年と、どのように機能しているかの検証は不十分であった。このことは、今後の研究課題として受け止めた。

## <註>

- (1) 文部科学省HP： [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2019.6.25.最終閲覧)
- (2) 上越教育大学附属小学校「今を生き明日をつくる子どもが育つ学校－『感性』がはたらく教育活動の充実－」 2018
- (3) ユネスコスクールHP： <http://www.unesco-school.mext.go.jp/aspnet/> (2019.6.25.最終閲覧)
- (4) 小出信也・濁川朋也・中野博史・釜田聡「知識基盤社会を主体的に生き抜く資質・能力と教育課程－上越教育大学附属中

- 学校の研究開発を中心にー」上越教育大学研究紀要 第36巻1号 pp.63-72 2016
- (5) 木村吉彦「生活科の理論と実践」2012 日本文教出版
- (6) 藤井千春「主体的・対話的で深い学び 問題解決学習入門」2018 学芸みらい社

### <引用・参考文献>

- 渋谷憲一「子供が生き生きと活躍する授業」東京書籍 1992
- 清水雅之・渡辺径子・他4名「総合的な学習の時間における学習主題及び内容構成を支える課題性と研究領域」上越教育大学研究紀要第35巻 pp.57-70 2016
- 松本謙一「子どもの育ちを楽しもう！ー『単元構想』による生活・総合の授業づくりー」『教育創造』vol.167 pp.7-13 2016
- 木村吉彦「幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科の教科特性とスタートカリキュラム」『教育創造』vol.169 pp.7-13 2011
- 平野朝久「はじめに子どもありきー子どもとつくる総合活動ー」『教育創造』vol.177 pp.4-11 2014
- 多田孝志「グローバル時代の人間形成における『はじめに子どもありき』を考える」『教育創造』vol.178 pp.5-11 2014
- 西野範夫「ともに生きあう愛の学びを生成する子どもありき」『教育創造』vol.179 pp.4-11 2015
- 多田孝志「『感性』を大切にした教育ー『教科教育』から考えるー」『教育創造』vol.181 pp.14-21 2015
- 鹿毛雅治「『感性』を大切にした教育ー『総合』から考えるー」『教育創造』vol.182 pp.4-11 2016
- 田村 学「『論点整理』の趣旨とその意義ー育成すべき資質・能力とアクティブ・ラーニングー」『教育創造』vol.183 pp.7-13 2016
- 藤井千春「子どもに『深い学び』はどのように成立するかー『主体的・対話的で深い学び』の意味を問うー」『教育創造』vol.188 pp.7-15 2018

#### \* 以下、上越教育大学附属小学校の研究出版物

- 新潟大学教育学部附属高田小学校「低学年教育の改善」1974
- 新潟大学教育学部附属高田小学校「子どもが生きる学校生活の創造」明治図書出版 1980
- 上越教育大学附属小学校「わが校の八十年の教育史」東京法令出版株式会社 1981
- 上越教育大学附属小学校「子どもが生きる学校生活の創造」1982～1985
- 上越教育大学附属小学校「学び続ける基礎を築く学校教育」1986～1989
- 上越教育大学附属小学校「創造性を伸長する教育課程」1990～1991
- 上越教育大学附属小学校「12年間の学びの創造」1994～1997
- 上越教育大学附属小学校「みんなで総合しよう」1998
- 上越教育大学附属小学校「学び続ける基礎を築く教育課程」1989
- 上越教育大学附属小学校「Curriculum 子供とつくるカリキュラム」2001～2002
- 上越教育大学附属小学校「わが校の百年の教育史」北越出版 2001
- 上越教育大学附属小学校「STORIA 生き生きとした子供が育つ学校」2002
- 上越教育大学附属小学校「Curriculum カリキュラムの評価改善」2003
- 上越教育大学附属小学校「STORIA 生き生きとした子供が育つ学校」2003
- 上越教育大学附属小学校「心豊かに生きる Vol.1」2004
- 上越教育大学附属小学校「心豊かに生きる Vol.2」2005
- 上越教育大学附属小学校「心豊かに生きる 研究会要項」2006
- 上越教育大学附属小学校「関係力」教育開発研究所 2006
- 上越教育大学附属小学校「心豊かに生きる Vol.3」2007
- 上越教育大学附属小学校「心豊かに生きる Vol.4」2008
- 上越教育大学附属小学校「人間社会を生きる子どもが育つ学校 vol.1」2009
- 上越教育大学附属小学校「人間社会を生きる子どもが育つ学校 研究会要項」2010
- 上越教育大学附属小学校「人間社会を生きる子どもが育つ学校 vol.2」2011
- 上越教育大学附属小学校「自分らしい生き方をつくる子ども」2012～2014
- 上越教育大学附属小学校「今を生き明日をつくる子どもが育つ学校」2015～2018

# Developing the Qualities and Abilities of Creators of a Sustainable Society

Michiko WATANABE\* · Satoshi KAMADA\*

## ABSTRACT

**KEY WORD** : Creator of a sustainable society qualities, ability, Joetsu University of Education Attached Elementary School

The present study aims to identify the curriculum development characteristics of the Joetsu University of Education Attached Elementary School by systematically reviewing its curriculum development history from the viewpoint of setting research tasks and the “quality and ability” structures in relation to curriculum and evaluation methods.

The study identified the following characteristics:

1. Research tasks are set considering problems in modern society, research background of the attached elementary school, and further curriculum improvement and development.
2. “Quality and ability” are shown either explicitly in relation to research tasks or implicitly through the images of the kind of people aiming at education practice study.